岩手の生協の今をお伝えする

岩手の生協

VOL.18 2009.3

岩手県生活協同組合連合会
〒020-0180　岩手郡滝沢村土沢 220-3
Tel019-684-2225／Fax019-684-2227

「協同組合講座」「生協学校」社会保障の実態を学習し、生協の役割を考え合いました

くらしを考える連続学習会
年金・社会保障の財源が消費税増税？

「いのちの山河～日本の青空Ⅱ～」
製作・上映運動を成功させる岩手の会を結成

特集

社会保障後退の今こそ、沢内村“生命尊重”行政の理念と実践を学ぶ

～「村長ありき」著者　及川和男さん講演
（０８年度第２回「協同組合講座」・「生協学校」）より～

■会員生協の取り組み紹介

- 岩手県庁生協
- 岩手県消費者信用生協

■岩手県生協連トピックス

- ３・２０世界の平和を願う市民のつどいお知らせ ほか

特集

社会保障後退の今こそ、沢内村『生命尊重』行政の理念と実践を学ぶ

～「村長ありき」著者　及川和男さん講演（08年度第2回「協同組合講座」・「生協学校」）より

今、地域医療は医師不足や財政悪化により危機的な状況を迎えています。また、この間の「格差と貧困」の広がり、社会保障制度の相次ぐ改悪によって、憲法二十五条が保障する「生存権」がおびやかされています。

今年度第2回の岩手県生協連主催「協同組合講座」「生協学校」では、社会保障後退の現状と岩手の医療費抑制計画の実態、かつて沢内村（現西和賀町）で深沢晟雄村長が村民とともにつくり上げた「生命行政」について学びました。

今回は特集として、及川和男さん（作家・「村長ありき」著者）の講演『沢内「生命行政」の理念と実践』から、沢内村の取り組みを学び、これからの私達の社会保障制度の充実を求める運動にいかしていきたいと思います。

■はじめに

岩手県の沢内村（現在は西和賀町）は、かつては無医村で日本一乳児死亡率が高く、冬は豪雪に閉ざされる貧しい村でした。深沢晟雄（まさお）さんは、１９０５年この村に生まれ、幾多の遍歴の後、１９５４年帰郷。１９５７年この村の村長に就任し、「人命尊重」の行政をすすめ、１９６２年、日本で初めて乳児死亡率ゼロという金字塔を樹立。また、全国に先駆けて老人医療費の無料化を実現するなど、多病多死で苦しんできた沢内村を日本でも冠たる健康な村にするという生命行政のさきがけとなりました。１９６５年1月28日、食道ガンに肺炎を併発し59歳で逝去した深沢さんの理念と実践方法を、共に学びたいと思います。

■生い立ちから帰郷、そして父の死まで（１９０５～１９５４年）

この村の小さな地主の家に一人息子として生まれた深沢さんは、小学校卒業後高等科へ進まされたが、懇願の末一年後に一関中学に進学。当時は先進校の盛岡中学に追いつき、追い越せという校風の中、弁論部で活動、このことで反骨意識がはぐくまれたのではないか。また、この頃賀川豊彦の「死線を越えて」を熟読し、影響を受けたと級友は語る。卒業後、どうしても勉学の道に進みたい深沢さんは、父から医師になることを条件に二高の理科に入学したものの、解剖など苦手で東北帝国大学（現東北大学）に進むときには無断で法文学部に入り、父親を激怒

生協の役職員・若手職員約50名が参加

会員生協の役員・幹部職員を対象とした「協同組合講座」（1月20日）には6生協から役職員38名が、入協10年前後の若手職員を対象とした「生協学校」（1月21日）には3生協の職員10名が参加しました。

学習1「学ぼう、変えよう！冷たい社会保障」

中央社会保障推進協議会
相野谷安孝事務局次長

大企業がこの間、規制緩和に名を借り「労働法制の改悪」や「低賃金の構造」を進め、世界的金融危機を理由に、「派遣切り」などにより労働者を解雇し、憲法で保障する基本的人権を侵す雇用破壊を進めていること。また、01年から構造改革を御旗に社会保障費の削減と医療費・保険料の国民への負担増に加え、後期高齢者医療制度の実施、介護保険制度はいまや

させた。このことを長く負い目に感じていたようだ。この時期哲学者阿部次郎の教えを受けた。阿部の説く「人格主義の教育」に傾倒。そして「価値の根本にあるものは人間だ。物の価値ではない」、「国家の強制の権利は道徳的な使命を無視して絶対視できるものではない」などの思潮に大きく影響される。しかし、卒業した時は、世界的な大恐慌のただ中、国内での就職先も無く、上海銀行に就職する。しかし戦争の時代に入り退職、台湾総督府に勤務し、妻子ともども台北に住むが、妻が妊娠中毒で死去したため、帰郷。この後、故郷で再婚し、一人娘を両親に預け、「王道楽土建設・五族共和」の理想を信じて再び大陸に渡って満州拓殖公社に就職するものの、中国人民の土地を奪い日本人に渡す仕事に理想はついえ退職。その後、山東省の炭鉱の総務部長で敗戦を迎えた。上司は逃亡するが、深沢さんは「炭鉱はこの国のもの、きちんと返す」と妻とともに残留し対応、八路軍による人民裁判にかけられたが、中国人たちの証言で無罪となり、妻と身一つで沢内村に戻った。そのころ、青年会の学習講座の講師をつとめたが、やがて大陸時代の上司の懇請で佐世保船舶工業所総務部次長となり、村を出る。朝鮮戦争の特需で拡大した経営が、休戦で不況となり、人員整理担当になるが、労働者の首は切れないと退職し、帰郷。この直後父親が死去。県立黒沢尻南高校沢内分校の臨時の英語教師になり、生徒たちに、「今の沢内村はこれでいいと思うか。君たち若者が力を発揮して、もっと人間らしく生きられる地域をつくっていかなければいけないのじゃないか」と話したという。

ここまでは、国内から大陸に就職するなど、自分の生活を何とかしようという当時の大学出のインテリが個人の幸福を求めての生活であったが、父親の死去で年老いた母と妻子を置いて外に出ることもかなわず、村政は村民たちの幸せの追求とはほど遠く、不衛生で、遅れた沢内村の現実に正面から向き合い、我慢とあきらめの中で暮らす村民たちをみて、苦悩したのでないか？そしてやがて、高校での授業中ぶりが評判となり、教育長就任を懇願されることになる。

■沢内教育長に就任、「行脚と対話で心起こし」ー村で生きる覚悟を（1954～1965年）

1954年9月、教育長に就任するやいなや、村内の行脚を始めた。めざす家々の相手は主人ではなく、主婦や嫁。そして、婦人たちに「戦後9年もたつのに、この村には、まだ婦人会が無い。婦人会をつくって、子育てや生活改善・栄養などの学習や、民謡や踊りなどのレクリエーションを楽しみながら活動しようではありませんか」と説いた。そして、賛同する主婦を連れて、次の家に行脚し、婦人たちの「心を起こし」ていった。青年たちには「青年会の立ち上げ」を、農協に行っては「青年部や若妻会を作ろう」、役場に行っては「労働組合をつくりなさい。村人に奉仕する労働組合運動をやったらどうか」とすすめて歩いた。最初はなかなか動かなかった村民も、深沢さんが助役になる頃には、労働組合も誕生、各地区には婦人会ができ、村婦連も結成、青年会の組織化も進んだ。行脚と対話をしながら、「みんなで一緒にやればできる」と村民たちの心を起こしていく。

・及川さんは、この「対話と行脚」の意味を次のように推理する・・

当時の封建的農村では、女性は、村全体と家庭でも男たちから差別されるという、二重の苦しい立場に置かれ、青年たちは親父に反対してもとあきらめているように見える。女性は自覚なく男に従い、青年たちも諦めて無気力にみ

崩壊状態にある。さらに、社会保障の財源を消費税増税に押し付けようとしている。これらは、日本の医療・介護など社会保障を根底から破壊し崩壊させることにつながることなどをお話しいただきました。

（相野谷さんの講演要旨は次号に掲載します。）

学習2 「政府の医療費抑制策で岩手の医療はどうなるか？」

岩手県社会保障推進協議会
村上和雄事務局長

政府の医療費抑制政策にそって岩手県は平成24年度までの5年間で医療費を105億円削減する計画。その中身は、政府管掌保険から都道府県ごとの「協会けんぽ」への切り替え（都道府県ごとに医

えるが、深沢さんは今の現象で人を見ないで、人間としてどんな感性や可能性を秘めているのかに着眼して、目覚める方向へ導いていき、みんなで一緒にやろうと働きかけた。これが、新しい村づくりの原動力となる。婦人や青年が自分の力で動き始めたのだ。皆さんの生協の「協同組合の定義と価値」の中身を深沢さんは学び実践したのではないかと思われるほど。つまり「自主と協同」、深沢さんは、対話の中から心を起こし（自主）、一緒にやろう（協同）と呼びかけた（コミュニケーション）。また彼は、自分が前に出るのでなく、お膳立てをし、その人たちにその気になってもらうということこそ必要だと見抜く優れた資質を備えていた。「自主と協同」は「協同組合の精神」そのものです。こうした原則を持っている組織で働いている皆さんが羨ましい限りです。

１９５７年「豪雪・多病多死・貧困」の三悪の追放をめざし、18代目の村長に無投票で当選した深沢さんは、「保健婦の設置」「保健委員会の設置」を行い、冬に閉ざされる村からの脱却をめざし「冬季交通確保期成同盟」を結成し動きだす。58年には沢内村役場から湯本温泉まで、ブルドーザーによる除雪を開始、63年には盛岡・湯田間の定期バスが開通し豪雪を突破した。また、良い医者を派遣しない岩手医大に見切りをつけ、母校東北大学の医学部に幾度も通って訴え、やがて院長に加藤邦夫、副院長に増田進というすぐれた医師を迎えるなど、村の病院体制を整え、乳児死亡率を３分の１に下げることに成功。そして１９６０年65歳以上の高齢者の医療費の無料化を国に先駆けて実施した。しかし、自主財源９００万円の村財政から２７０万円を当てるという内容に、反発した人たちは「かまど返し村長」と批判し、次の村長選挙に対立候補を立てた。接戦の末、１７８６票対１４８１票で深沢さんが勝利。この勝利の力となったのは草の根からの自治の力だった。村民と対話を重ねていくうちに、三悪問題が浮かびあがり、「これを解決するためには、みんなが責任を持って協同してやらなければいけない。力を合わせよう」と自分は演出に徹し、実現できた時にも、「みんなでやったからできた」と村民をたたえるという民主的な方法の成果だったといえよう。

■全国で初「老人医療費無料化」と「乳児死亡率ゼロ」の実現！

１９６０年、深沢村長主導で「地域包括医療計画案」がつくられ、２年間、村民たちが討議した。その中身は、「1、すこやかに生まれる。2、すこやかに育つ。3、すこやかに老いる」を目標とした。また、この年の12月、「65歳以上の高齢者に国保の十割給付」を始める時、県からは国保法違反だといわれたが、「本来は国がやるべきことをやっていない。国は必ず後からついてくる。訴えられたら受けて立ち、最高裁まで争う。わたしは憲法二十五条に反していない」との深沢さんの姿勢は県の役人の心も動かした。保健活動の一環として実施するという説明で村議会も同意した。これは全国の老人医療費無料化の草分けとなる画期的な施策だった。翌61年からは国保の十割給付を60歳からとし、同時に1歳未満児へも拡大した。（これは、合併まで村民協同のあかしとして堅持されてきた。）

61年に入り、深沢村政2期目も、生命と健康を守る村民総ぐるみの運動は進められた。村の高齢化は進んだが、予防医学に徹して早期発見・早期治療に努めた結果、老人医療費は大幅に低下し、70歳以上の老人医療費無料化は深沢村長の予言通り、国の政策となった。しかし、１９８３年に至って、国は一部有料化と後退した。沢内村では世論の力によって、老人医療費削減を競争）、「公立病院の改革（県立病院の入院ベッド削減や無床化）」という地域医療を崩壊させかねない改悪。自治体の首長が反対し、地域住民の参加と声の反映を抜きにしたこれらの計画は「今まで地域で築いてきた医療・保健・福祉の連携を崩壊させるもの」との反対運動が高まっている。地域医療を守るために、医師の養成に全力をあげ、国の医療費・社会保障費削減計画を転換させることが大切とのお話をいただきました。

「生協学校」では加藤善正県生協連会長による学習講演「いまこそ生協のアイデンティティとミッションを問い直そう」も行いました。

費無料化は維持された。当初あった、どうせタダだからとの乱受診は影をひそめ、「自分たちの健康を、自分たちで守る」という意識が根付いていった。深沢村長の残した力、志がその運動を支えたのだと思う。

そして、乳児死亡絶滅運動が進み、1957年に出生千人に対し70.5%だったのが、62年、沢内村の124人の赤ちゃんは一人も亡くならず、とうとう「ゼロ」を達成した。これこそが、深沢村長のもと、村ぐるみの保健活動を積み上げた結果、成し遂げられた金字塔である。豪雪の僻村が築きあげたこの偉業はわが国の三千数百の自治体初の快挙で、沢内村の生命行政は一躍全国から注目されることになった。村民はその後「昔は親父たちから沢内出身と言うなと言われたが、今ではわれわれはあの沢内村の出身ですと誇りを持って言えるのは深沢さんのおかげです」と話す。

深沢さんの考えの根底には「形式民主主義」ではなく、「民主主義とは、人間を大事にする思想、生まれや育ちで差別することは許されない。教育と医療は国家が全責任を負うべきこと」という信念があった。これは、フランス革命に通ずる「自由・平等・友愛」という近代民主主義のもたらしたものと共通の価値観だと思う。深沢村長は政策を出してついて来いというのでなく、対話の中から集約された問題を、みんなで力を合わせて解決しようとする「草の根からの自治の力をつくり出す」、つまり、「村民を信じ、自分たちで村づくりをやろう」と働きかけた。この「人を信じ、みんなで生み出すこと」に眼目を置くというリーダーシップは、生協や労働組合など多くの組織に参考になるのではないか。

■三せい運動（「一人ひとりがせい、話し合ってせい、みなでせい」）こそ深沢さんの理念

もうひとつ深沢さんのもとに生まれた運動で重要な合言葉のようなものですが、「三せい」運動があります。この「せい」は「ああしよう」「こうしよう」の「する」の掛け声のようなものです。「一人ひとりがせい、話し合ってせい、みなでせい」という運動は、村内の長瀬野地区から生まれたもので、まさに深沢さんの理念と方法意識が集約されていると思います。「一人ひとりがせい」はまさに「自主性」です。「話し合ってせい」はいうまでもなく「民主性」です。そして、「みなでせい」は「協同性」です。漢字で書くと「自主性、民主性、協同性」と固いイメージに見えますが、深沢さんは「ああしろ、こうしろ」ではなく、自分たちで考えたことを、「一人ひとりがせい」、そしてみんなで心を開いて「話し合いをせい」、そして力を合わせて「みんなでせい」、「うんだあ、うんだあ」となる合意を大切にしてきたのです。

これこそ、みなさんの生協の職場で活かしていただきたいと思います。

及川さんは、「現実にはお金が無いから病院なくすという〝物種あっての命〟という逆さまの論理が横行しています。どうぞ、皆さまも、この深沢村長の言葉を耳の底に響かせて、日夜のお仕事に精を出されますようにお願いします」と結びました。（文責・事務局）

「村長ありき」（新潮社）の著者・及川和男さん（一関市在住）の略歴

1933年、東京池袋生まれ。戦争で疎開し、岩手県一関市に住みつく。県立一関一高卒業。24年の銀行員生活の後、1976年退職し作家生活に入る。

1999年、「なんでも相談ひきうけます」で第15回北の児童文学賞を受賞。

日本文芸家協会・日本ペンクラブ・島崎藤村学会会員。

主な著書：『村長ありき』『イーハトーブ通信』（新潮社）『生命村長　深沢晟雄物語』（童心社）『いのちは見えるよ』（岩崎書店）など多数。

「命あっての物種」

1965年、岩手放送から新年に放送された、深沢村長の遺言ともなった「年頭のあいさつ」から

「（抜粋）あけましておめでとうございます。沢内甚句の沢内村の深沢村長です（中略）。私は、民主主義の基本である〝人命尊重〟の考え方を、政治の最高最終の目標として、今後も住民福祉のために努力する所存です。ややもすれば、現実的な生活の厳しさから、最近は〝命あっての物種〟ではなく、〝物種あっての命〟という風に考え易いのでありますが、命より物が大切だとなっては、これは恐ろしい危険な考え方と言わざるをえません。清々しい希望が躍動する新年に、政治の中心は〝生命の尊厳尊重〟にあるということを再認識したいと思います。経済開発・社会開発を進める政府にあっては、〝生命尊重〟のためにこそ経済開発も社会開発もあるのだという政治原則を再認識する年になってほしいと思います。」

沢内村〝生命行政〟の理念を、岩手から全国へ発信！

劇映画「いのちの山河～日本の青空Ⅱ～」の製作・上映運動を推進します。

～08年12月「成功させる岩手の会」が発足

この度、沢内村（現西和賀町）の生命行政を推進した故深沢晟雄村長を主人公にして、「自分たちで命を守った村」を描く劇映画「いのちの山河～日本の青空Ⅱ～」の製作が発表になり、2月中～下旬には地元沢内でのロケも行われました。

医師不足や財政悪化による地域医療の危機が叫ばれ、後期高齢者医療制度への国民的批判の高まり、介護保険や医療制度などの社会保障制度全般が揺らぐ中で、47年も前に全国に先駆けて老人（60歳以上）と乳児の医療費無料化の実施、全国初の乳児死亡率「ゼロ」を達成した沢内村の輝かしい業績は、憲法25条を活かす上でも全国からあらためて注目を集めています。

この映画はこうした「健やかに生まれ、育ち、老いる」という沢内村の生命行政の理念と、「何よりもいのちが大切、そのいのちはすべて平等であり、格差があってはならない」という現代的命題を、映画を鑑賞するすべての人々に強く訴えるに違いありません。

沢内村の先鞭に習い、その後全国的にも実施された老人医療費無料化が、1983年に「臨調行革路線」により一部有料化となりました。これに反対する人々が、沢内村の生命行政のともし火を消さないように、「いのちの灯」の碑を建立しましたが、こうした運動に当時取り組んだ団体や、社会保障改悪に反対する取り組みを積極的に展開している団体・個人、前作「日本の青空」上映運動に取り組んだ人々が集まり相談し、〝劇映画「いのちの山河～日本の青空Ⅱ～」製作・上映運動を成功させる岩手の会〟が08年12月10日に発足しました（左写真）。

会の結成には高橋繁西和賀町長（元沢内村長）、藤井克己岩手大学学長、村田源一朗岩手日報社会長など40名が「呼びかけ人」に名を連ね、岩手県生協連は加藤善正会長理事が「成功させる岩手の会」事務局長として積極的に運動を推進します。

劇映画
いのちの山河
～日本の青空Ⅱ～

STORY

「豪雪・貧困・多病」という、大きな問題を抱えていた山あいの小さな村 沢内村（現西和賀町）

長く無医村であったこの地で、父親から医者になることを期待されながらも村を離れていた深澤晟雄はある日、妻と帰郷する。

昔と変わらず悲惨な村の状況を前に晟雄は、何とか村をよくしたいと立ち上がった。自分達を苦しめている問題を打破しようと村民に語りかけ、自らの信念である『生命尊重』行政の在り方を説き、いよいよ村民の医療無料化に踏み切ろうと決意するが、国民健康保険法違反という壁に突き当たってしまう。

晟雄は、村民のいのちのため、全国に先駆けて何としてでも実現させようと「少なくとも憲法違反にはならない、国がやらないから、村がやるんです！」と憲法25条を盾に、老人・乳児医療無料化を推し進めていく。

やがて、全国でも最悪の乳児死亡率だった村が、全国初の乳児死亡"ゼロ"という記録を生みだすまでになる。

しかし、そこに辿りつくまでには、晟雄と村民たちの奮闘の日々と、数々のドラマがあった…。

CAST

村長・深澤晟雄役／長谷川初範
妻のミキ役／とよた真帆
晟雄の父・深澤雅訓役 加藤 剛
教育長・太田桂蔵役 大鶴義丹
フリージャーナリスト・中野美代子役 小林綾子
ほかに 宍戸開、麻本絵吉、若井なおみ が出演。

深澤 晟雄（ふかさわ まさお）の人物像

生命の尊重されない政治や
世相の縮図のように、
私の村ほど貧困にこれを
現したものもかなかろう。
人命の格差は絶対に許せない…
「深澤晟雄の政治理念」より

深澤晟雄（ふかさわ まさお）の略歴

年号	深澤晟雄（ふかさわ まさお）の略歴
1905年	12月11日、岩手県和賀郡沢内村（現・西和賀町）に生まれる。一関中学校、第二高等学校（旧制）理科を経て東北帝国大学法文学部卒業。上海銀行、台湾総督府、満州拓殖公社、などで勤務
1946年	敗戦後、沢内村に戻り、農業に従事。青年会の学習講座で憲法を担当。平和と民主主義の尊さを説く。その後、再び村を出て在世保船舶工業で勤務
1954年	帰郷。高校の英語講師を経て教育長に就任。
1957年	第18代沢内村村長に当選。
1960年	全国に先駆け、老人（60歳以上）と乳児の医療無料化を実施する。
1962年	全国初の乳児死亡ゼロを達成。全国から注目を浴びる。
1965年	1月28日逝去（享年59歳）

秋のロケ風景

「成功させる岩手の会」の当面の取り組み

○製作協力金（1口10万円＝製作協力券100枚）を県内で100口（1千万円）目標に呼びかける。岩手の会としては小分けにし1万円単位での申し込みも受け付けます。

○2月　沢内ロケのエキストラ出演者を募集し、バス参加。

○シンポジウム「沢内村の生命行政に学ぶ」3月7日（土）13時～県水産会館

○「深沢晟雄資料館」見学ツアー

などに取り組みながら、県内の製作・上映運動を大いに盛り上げていきます。

会員生協の取り組み紹介

岩手県庁生協

岩手県庁生協では、県内の授産施設や障害者就労支援事業所の利用者が日ごろ生産しているお菓子や日用品などを販売しています。

県庁地下の売店内では県内13の障害者就労支援事業所などの常設販売ブースを開設し、約70種類を取り扱っていますが、このように各地の事業所が参加するブース設置は初めてのことです。

障害者週間だった昨年12月9日には、売店の前で施設利用者が直接商品を販売。手作りケーキやパン、コーヒー豆、野菜などのほか、品評会で高い評価を得たプリンやシフォンケーキを出品した施設もあり、人気の商品は30分ほどで売切れるなど昼休み中の県庁職員でにぎわいました。

食堂部の「岩手まるごと弁当」

また現在、県が取り組んでいる「買うなら岩手のもの」「食べるなら岩手のもの」運動に賛同し、県庁生協では食堂部が「岩手まるごと弁当」（県が認証する地産地消弁当）を提供しています。花巻産白金豚のメンチカツ、三陸イカの磯っ子焼き、ごはんは県産ひとめぼれなど岩手の味たっぷりのお弁当です。業務部でも地元工芸品の展示即売会などに取り組んでいます。

岩手県消費者信用生協

いわて生活者サポートセンターは2月から盛岡市との協同事業として、「くらしとお金の安心支援事業」に取り組んでいます（同センターは信用生協を母体に設立されたNPO法人）。

この事業は、債務整理後に金融機関を利用できずに生活再建が困難な方や、DV・依存症・失業などさまざまな理由で生活不安定に陥った方等に対し、関係機関が連携して相談とセーフティーネット貸付の拡充の2本柱で支援します。関係機関は労働金庫、市社会福祉協議会、市役所、信用生協で、いわて生活者サポートセンターが総合相談窓口の役割を果たします。

事業の背景には貸金業法の改正などがあります。一人当たりの貸出金が総量規制されたことにより、消費者金融から借りたお金を自転車操業的にほかの消費者金融の返済に充てることが難しくなり、これによって借金返済に行き詰った人が非合法の「ヤミ金」に手を出したり、自殺に追い詰められることが懸念されます。多重債務の背景にある失業、精神疾患などの問題も含めて相談を受ける窓口を一本化して解決を図り、経済的な救済だけでなく、家計診断を通じて生活再建についても支援します。

■「消費税を増税しないと社会保障はよくならないのか」税・社会保障学習会

2月12日、今年度3回目となる「くらしを考える学習会」を、県消団連・県生協連・いわて生協・医療生協などが主催しました。富山泰一先生(税理士・不公平な税制をただす会事務局長)が「消費税を増税しないと社会保障はよくならないのか　それにしても所得が減っているのに、なぜ、税・社会保障費が増えるのか」との演題で学習講演し、間接税、直接税、応能負担等民主的で公正な税金のあり方について学びました。先生は自らの試算をもとに、いかに大企業・資産家がこの間二重三重に減税され、その分国民が増税されてきたかを分かりやすく説明し、「税・社会保障負担の不公平を是正し、歳出の見直しをすれば財源はある」と話されました。

参加者からは「大企業に国民の税金を使いながら、経営回復しても国民にそのお金を返さないのは何故か」「私たちは知らないことが多い。政界、財界にだけ都合のよい今の日本をどうしたら変えられるのだろう」「税金など今私たちを苦しめている諸々のことを、もっと学習してみんなのものにしていかなければと思いました。」等の感想が寄せられました。

■イラク・アフガン・パレスチナに平和を「平和を願うつどいin岩手」にご参加を！

米英によるイラクへの先制攻撃が始まってからこの3月20日で6年が経過します。この間、イラクでは数10万とも100万ともいわれるイラク市民が犠牲となり、その多くは戦争に関係しない子どもや女性たち・・アフガニスタンでも戦闘が激化し、市民の犠牲も増え続けています。

また、昨年末からのイスラエルによるパレスチナ・ガザ地区攻撃、「海賊対策」と称したソマリア沖への自衛隊派兵の決定など、世界の平和をめぐる状況は混沌としています。

岩手では2003年から毎年3月に「平和のつどい」を開催し、戦争の実態を知り、平和への願いを社会的にも大きくアピールしてきました。今年も、県内で平和を守る取り組みを推進している団体が実行委員会を立ち上げ、つどいを開催します。(事務局：県生協連、県消団連)

イラク・アフガン・パレスチナに平和を

3・20世界の平和を願う市民のつどいin岩手

3月20日（金・春分の日）

10時30分～12時

岩手教育会館　大ホール《参加無料》

○講演 最新映像で見るイラク&ガザ

～今こそ平和憲法を活かすとき～

イラクの子どもを救う会代表

西谷文和さん

3月中旬までイラク滞在の西谷さんから現地の最新情報を聞き、イラク戦争とは何だったのか、一緒に考えます。

○つどい終了後、大通り～菜園通りを〝ピースパレード〟します

飛び入り・仮装　大歓迎！

岩手県生活協同組合連合会

■住所　〒020-0180 岩手郡滝沢村土沢220-3　■電話　019-684-2225　■FAX　019-684-2227

URL　http://kenren.jccu.coop/iwate/　E-mail　iwatekenren@snet.coop.or.jp